中世ドイツ語における迂言表現

── 押韻技法の観点から ──　その2

武　市　　修

1．はじめに

新高ドイツ語（Nhd.）では前置詞 zu なしで単独の不定詞を伴う動詞は，話法の助動詞と，構文上それらに準ずるものとして初級文法で説明される，使役の助動詞として用いられる lassen および sehen，hören，fühlen などの，いわゆる知覚動詞，感覚動詞以外にいくつかある．例えば lehren，lernen，helfen は er lehrt die Schüler rechnen，ich lerne Auto fahren，er hat ihr aufräumen helfen のように zu のない不定詞をとる．heißen も「命じる」という意味で用いられるときは er heißt mich schweigen のように，人の4格目的語と不定詞をとる．ただし，これらの表現は，不定詞句が長くなれば，ふつう zu 不定詞で表わされる[1]．

また，場所の移動を表わす動詞，とくに gehen は angeln gehen，baden gehen，einkaufen gehen などのように，目的を表わすのに動詞の不定詞を伴うことがある．sich schlafen legen はそれに準じた表現であろう．しかしこのような用法も次第に一定の言い回しに限定され，今日では trinken gehen，sitzen gehen，stehen gehen とは言わない．また kommen も俗語で er kam gratulieren のような表現が行なわれるのみである．

その他に brauchen と tun も，動詞の行為を強調するときには助動詞的に用いられ，wundern braucht man sich nicht や warten tu ich nicht gern のように不定詞が文頭に置かれることがあり，標準語でもこのような zu なしの表現が好まれる[2]．しかしこれらも強調表現でない場合には，brauchen は zu 不定詞をとり，tun はこのように助動詞的には用いない[3]．

Nhd. ではしかし，全体的にはこのように zu のない不定詞とともに用

いられる動詞の用法は少なくなり，動詞が不定詞を伴う場合はふつう zu 不定詞の結び付きとなる．ところが中世のドイツ語では逆に，Nhd. の前置詞 zu に当たる zi や ze の付いた不定詞をとる動詞の方が稀であり，非常に多くの動詞が ze の付かない単独の不定詞とともに用いられていた．本稿では中高ドイツ語（Mhd.）の脚韻文学に見られる，ze のない不定詞を伴う動詞表現を，押韻のための迂言手段と考えられる結び付きを中心に検討してみたい．なお，ここで考察の対象とするのは，主として『ニーベルンゲンの歌』*Nibelungenlied*,『イーヴァイン』*Iwein*,『パルツィヴァール』*Parzival* の 3 つの叙事作品であるが，他の作品からの用例も適宜取り上げることになる．

2．場所の移動を表わす動詞と不定詞

場所の移動を表わす動詞は，移動の目的を示すのに ze のない不定詞をとることが，Nhd. よりもずっと多い．例えば，

(1) dô ich durch daz gestüele reit
die lieben geste schouwen, (g. Gerh. 3704f.)
お客さま方の様子を見るために
宴席のあいだを馬で回って行ったとき

(2) Dô sâzen aber ruowen　　die von Burgonden lant. (NL 2079, 1)
そこでブルゴントの国の一同は休息をとるために坐った．

(2) の例は千人を越えるテネマルク（デンマーク）とデューリンゲン（テューリンゲン）の武士たちが，主君の仇討ちをしようとして，大広間に立てこもるブルゴント勢に襲いかかってきたのを，ブルゴントの勇士たちがすべて討ち果たしたあと，休息をとろうと坐り込む場面である．デ・ボーア（Helmut de Boor）はこの sâzen ruowen を，ちょうど Nhd. の gingen schlafen と同じような用法で，setzten sich, um auszuruhen であると注釈を付けている[4]．因みに sitzen は今日の標準ドイツ語では状態を表わし「坐っている」を意味するが，Mhd.ではそれと並んで「坐る」という動作を表わす意味でもよく用いられた．それは今日，スイスのドイツ語に残っている．

gâhen, gân, îlen, komen, rîten, varn などは，上例のように，その移動の目的を ze のない単独の不定詞で表わすことが多いが，中でも gân は ezzen gân, houwen gân, kurzwîlen gân (= spazieren gehen Gregor. 807), ligen gân, ruowen gân, schouwen gân さらに sitzen gân や stân gân など巾広く用いられる．

ところがこのような表現の中で，時として，場所の移動は問題ではなく，不定詞の方が実質的に述語の役割を果たすことがある．例えば，

(3) nâch sô grôzer arbeite / vart ruowen... (g. Gerh. 2732f.)
こんな大きな苦しみを味わったあとなのですから，
休息をおとりなさい……

(4) „wir suln ouch tâlanc ruowen gên."
wênc wart in bette und kulter brâht:
si giengn et ligen ûf ein bâht. (Parz. 501, 6-8)
「さあ，そろそろ休むことにしよう．」
彼らにはベッドもシーツも用意されなかったので，
彼らはかき集めた木の葉の上に身を横たえた．

とりわけ gân が sitzen の不定詞を伴う場合，gân の意味がほとんどなく，sitzen と同義である個所がしばしば見られる．例えば，

(5) Gêren den vil rîchen bat man an den sedel gân.
"Erloubet uns die botschaft, ê daz wir sitzen gên.
uns wegemüede geste, lât uns die wîle stên.
(NL 745, 4-746, 2)
剛気なゲーレは着席するよう求められた．
「席に着く前に使者の用向きを伝えることをお許し下さい．
旅に疲れた身ではありますが，その間は
立たせていただきたい．

(6) An ein gestüele er sitzen gie.
den koufman er des niht erlie,
er muoste zuo im sitzen dran. (g. Gerh. 877-9)

彼［＝皇帝］は椅子に坐った．
商人に彼はそれを免じなかったので
商人は彼のそばに坐らざるを得なかった．

(5) の例はジーフリトとクリエムヒルトをラインの国へ招待すべく，ブルゴントから派遣された勇士ゲーレが謁見を許され，国王夫妻の前に着席を勧められたときの情景である．746節1行目の sitzen gên は前節4行目の an den sedel gân と同じ意味で，gên そのものにはほとんど実質的な意味はなく，「着席する」である．Nhd. の zu Bett gehen や ins Bett gehen に gehen の意味がほとんどないのと同様である．(6) の例も皇帝の前に召し出されたケルンの商人ゲーアハルトが着席するよう促されるが，身分の違いから恐縮し，それを免じてもらうよう願うが許されず，止むなく恐る恐る皇帝のそばに坐るという場面である．ここでも1行目の sitzen gie は3行目の sitzen と同義である．

『ニーベルンゲンの歌』では不定詞形に上の例に見られるように gân と gên の2つの形が現われるが，gân は前つづり ge- の付いた不定形4回を含めて169回すべてで押韻に用いられ，押韻相手の語は dan，man，getân，stân，hân，lân，gewan，began，bestân など数多くある．ところが gên の場合，19回用いられるうち16回が行末に来て，押韻相手は stên 8回，verstên 5回，understên 2回，bestên 1回と，すべて stên である．『イーヴァイン』では gên の形はなく gân 形のみで，27回中22回，gât が16回中9回行末に来て，押韻相手も様々である．『パルツィヴァール』では逆に gân 形がなく，不定詞 gên が42回中33回行末で，gestên と verstên それぞれ1回を含め，すべて stên と，そして gêt も31回中20回何らかの stêt と押韻している．

gân が不定詞 stân をとる例も時に見られる．この場合は sitzen gân とは逆に，stân にほとんど意味がなく，ただ韻を踏むためにのみ stân が添えられているようである．

(7) herre, gât durch got von mir stân.
ez muoz iu an den lîp gân,
und ersiht iuch mîn herre: (Er. 8986-88)

騎士さま，お願いですから私から離れて下さい．
もしわが殿があなたのお姿を見れば，
あなたのお命にかかわることになります．

(8) Prünhilt mit ir frouwen　gie für daz münster stân.
(NL 845, 1)
プリュンヒルトは侍女たちとともに大聖堂の出口へと急いだ．

(7) の例はエーレクに挨拶された婦人が，嫉妬深い夫に見られたら大事になると心配して言ったことばであり，「私の前から離れる」ことを求めている．(8) の例ではグロッセ（S. Grosse）はここを „Brünhild blieb mit ihren Damen vor dem Münster stehen.“「ブリューンヒルトは侍女たちとともに大聖堂の前で立っていた」と訳しているが，この訳は不適当であろう．それぞれの夫自慢から始まった2人の王妃の言い争いがエスカレートし，王妃としての存在そのものにかかわる問題にまでなってくる．プリュンヒルトは夕べのミサに詣でる際に，クリエムヒルトの目の前で彼女より先に大聖堂に入ることによって，優位な王妃の立場を見せつけようとする．これに対しクリエムヒルトは兄嫁の知らない新床での秘密を暴露し，彼女を徹底的に侮辱し，呆然自失の兄嫁を尻目にさっさと大聖堂に入ってしまう．「身も心も打ちひしがれた」プリュンヒルトは，人々がどんなに熱心に神にミサを捧げようとも心ここにあらず．彼女はただただ早くミサが終ってくれることを願い，帰りにクリエムヒルトにその発言をさらに問い質すことばかり考えていた．そこでミサが終るのを待ちかねて，大聖堂の出口へと急いだのである．従ってここでは stân によりも gie の方により大きな意味がある．

このような不定詞 stân が gân と用いられる例は，ハルトマンの『エーレク』*Erec* に4度，『ニーベルンゲンの歌』には6度あるが，すべて stân は行末にある．しかし『パルツィヴァール』では不定詞 stên が gên とともに用いられる例は皆無であり，stên はもっぱら gên の押韻相手である．因みに不定詞 stân は『ニーベルンゲンの歌』では87回使われ，ge- の付いた不定詞 gestân 10回も含めると97回すべて行末で押韻し，stât も32回中30回脚韻に用いられ，それぞれ押韻相手はさまざまで

ある．また stên も14回現われるが，そのうち10回は行末で，gên と 8 回，ergên と 1 回，bestên と 1 回韻を踏んでいる．stêt は 6 度行中に現われている．ハルトマンでは 5 つの叙事作品で stân が63回中59回，stât が92回中64回行末でさまざまな語と押韻している．これに対し『パルツィヴァール』では gân と同じく stân 形はなく，stên が41度現われ，そのうち36度行末でほとんど gên と韻を踏み，stêt も66回中28度押韻に用いられ，そのうち25回は何らかの gêt が相手である．ここで gân, stân 等について，3 つの作品において押韻に用いられた割合を，それぞれ前つづり ge- の付いた形も含めて一覧表にして示してみよう（かっこ内は押韻数で内数）．

	NL	Iwein	Parz.
[ge-] gân	169 (169)	27 (22)	
gât	17 (11)	16 (9)	
[ge-] gên	19 (16)		44 (35)
gêt	7 (0)		31 (20)
[ge-] stân	97 (97)	20 (17)	
[ge-] stât	34 (32)	27 (17)	
[ge-] stên	15 (11)		44 (39)
[ge-] stêt	6 (0)		73 (34)

押韻する手段として不定詞を伴う gân が多様に用いられる例を見てきたが，本来なら不定詞を用いるべきところで，韻律の関係から現在分詞が現われている例を次に見てみよう．

(9) diu vűr sî <u>súochènde</u> <u>réit</u>
und gewannes michel arbeit. (Iw. 5775f.)
その娘が彼女［＝妹姫］の代りに捜しに出かけ
そのために大変な苦労をすることになった．

これは『イーヴァイン』の次のような場面の一節である．黒いばら伯の残した遺産をめぐる争いで，世間知らずの妹姫が，すべてを一人占めにした強欲な姉姫に対し，正当な相続分を自分に譲ってくれなければ，アルトゥス王に訴え出て，代理の戦士を見つけ戦いで決着をつけると言

う．すると奸智に長けた姉姫は先手を打ってアルトゥス宮廷に行き，宮廷随一の騎士ガーヴァインを自分の戦士として戦ってもらう約束を秘かにとりつける．遅れて到着した妹姫が自分のために戦ってくれる戦士を得られないまま，戦いの期日40日の間に，噂さに聞くライオンを連れた騎士を見つけて頼もうと捜しに出かける．しかしどこにいるかも分からない騎士を捜しあぐね，病気になってしまう．そこで親しい身内のもとに行き，事情を話したところ，その人が，自分の娘を妹姫の代りに騎士探索の旅に出してくれることになる．5775行目の diu は前行に出てくる彼の娘 sîn selbes tohter を先行詞とする関係代名詞である．前からの続きでこの行は「捜しながら馬を進める」ではなく，「捜しに出かける」の意味である．ここは不定詞にすると弱音がなく，行の正しいリズムがとれないので，代りに現在分詞 suochende が用いられているのである．その前に妹姫がアルトゥス宮廷に別れを告げ，代理の戦士を捜しに行く個所はその必要がなく，次のように不定詞で押韻している．

(10) und bat ir got ruochen
und vuor ir kempfen suochen. (Iw. 5759f.)
そして（彼女は）神の庇護を願い
彼女の戦士を捜しに出かけて行った．

次の例もこれと同じように韻律の関係で現在分詞となっている．

(11) Sus begúnder súochènde gân
und sach ein schœne palas stân: (Iw. 6425f.)
こうして彼は探索に出かけて行き
そしてすばらしい宮殿に行き当たった．

ここはライオンを連れた騎士が「悪しき冒険の城」に行き当たり，300人の乙女が重労働に苦しんでいるのを見た場面である．彼女たちの話を聞いたあと，この城の様子をうかがいに城内に入って行くところだから，この suochende gân は「探索に行く」の意味である．因みに begunder (< begunde er)の beginnen も，後で見るように，不定詞とともに用いられ「～し始めた」ではなく，行を整え，韻律を満たすための冗語的な

迂言表現である．

このような現在分詞を伴った表現にも，不定詞の場合と同じく，場所の移動が問題ではなく，現在分詞が実質的な述語となる例が，前稿で挙げた例[5]以外にも見受けられる．

(12) bî der hant er si vienc:
vil genôte er súochènde giénc, (Er. 6688f.)
彼［＝エーレク］は彼女［＝エニーテ］の手をとった．
彼は一生懸命に捜した．

これらの例からも，押韻とリズムのために詩人たちがいかに苦労したかが見てとれる．もちろん押韻のためばかりでなく，文章に採を付けるためにも，さまざまな表現を駆使したのであり，すべてを韻文文学の特徴として片付けるわけにはいかないが，しかし韻律を整え，脚韻を踏むことは当時の文学では，ほぼ絶対的に要求される条件であり，そのために今我々が見ている目的を表わす表現も，不定詞ばかりでなく，次のように前置詞 durch や ze を用いることも当然あった．

(13) si gíenc ouch dár durch schóuwèn. (Parz. 574, 9)
(14) als ér ze tánze sólde gán, (Gregor. 3398)

3．kunnen と不定詞

kunnen は元来 zeugen を意味する動詞 kinnen の過去形単数 kan，複数 kunnen が現在の意味に転用されて用いられるようになった過去現在動詞である．もうひとつの過去現在動詞 mugen が肉体的，物理的強さと力を表わすのに対し，kunnen は Mhd. では知的能力や理解力を表わす．そして Nhd. の können と同じように，すでに Mhd. においても多くは不定詞を伴って用いられるが，それ以外に本動詞としても 4 格の目的語をとったり，前置詞 mit や ze をとることがあった．先ず，単独で用いられるさまざまな用例を示すと，

(15) und wil dirz helfen enden, so ich aller beste kan. (NL 53, 3)
そしてわしに出来得る限り，そなたがそれを

やり遂げる援助をしてやろう.

(16) mit der tjost si bêde kunden,
unt sus mit anderm strîte. (Parz. 704, 6f.)
彼らはふたりとも槍の戦いにも
またその他の戦いにも通じていた.

(17) die ze arbeite kunden, die tumben si dô lêrten, (Kudr. 285, 4)
航海の苦労によく通じている者たちが,
経験の浅い若い者たちに教えた.

(18) der sîne rîterschaft wol kan
und sîne kraft mit listen
ze rehten staten vristen (Iw. 5318-20)
騎士の戦いをよく心得ており
自分の力を賢明にいざという時の
ために蓄えておくことのできる（賢明な男）

(15) の例は Nhd. でもよく見られる，不定詞を省いた用例で，『ニーベルンゲンの歌』だけでも aller+ 副詞の最高級を伴うこのような言い回しが 7 度用いられ，すべて kan で押韻している．(18) の例は kan が本動詞として 4 格の目的語 sîne rîterschaft をとり，さらに vristen の不定詞句をとったものである[6]．上に挙げた例は『クードルン』*Kudrun* の例以外は kunnen の定形が行末に来て押韻している．

さて，この kunnen が時に，それ自体にほとんど意味がなく，不定詞とともに用いられて，押韻のための迂言手段となることがある．

(19) und sî iu daz vür wâr geseit
daz ich iu durch iuwer vrümekheit
al der êren wol gan.
der ich niht sêre engelten kan. (Iw. 7455-58)
しかとそなたに申し上げよう.
私はそなたの勝れた武勇のために
すべての栄誉をそなたに譲ろう．そうしても
私にはそれほど不名誉にはなるまい.

(20) vrouwe, ich tuon iu ungemach:
ich kan ze lange sitzen.
daz entuon ich niht mit witzen. (Parz. 29, 18-20)
女王さま，すっかりお邪魔してしまいました．
長居しすぎです．
分別のない振舞でした．

(19) は姉妹の遺産争いで代理の戦士となったイーヴァインとガーヴァインが，互いに相手の素姓を知らないまま，アルトゥス王が開いた裁きの場で激闘をくり広げる場面である．相手が一太刀浴びせれば倍にして返し，それに対してまた果敢に反撃するという壮絶な一騎打ちが日の暮れるまで続けられる．しかし実力相半ばする両勇士の間では決着がつかず，日没のため一旦休止ということになる．相手が何者か知らないで戦ってきた2人であるが，互いに相手の実力を認め敬意を抱き合う．上の例文は，ライオンの騎士から名を尋ねられたガーヴァインがそれに答えて言うことばの一部である．Mhd. では kunnen は事物を主語にして可能性を表わすことは稀であり，たいてい人を主語にして，先に述べたように，知的能力，理解力を表わす．しかしこの個所は辞書にも挙げられているとおり，kan に特別の意味はなく，Nhd. では訳す必要のない単なる迂言表現である[7]．辞書の当該個所には (20) の例も含めて『パルツィヴァール』からの用例が多数挙げられているが，それらもすべて kunnen のいずれかの形か不定詞のどちらかで押韻している．

このような用法を確認するために，さらに『イタリアの客人』*Der Wälsche Gast* から次の一節を示してみよう．

(21) ouch wizzet daz der selbe man
daz slehte krump machen kan
unde machet daz krumbe sleht. (W. Gast 13427-29)
また知っておいていただきたいのですが，
そういう人はまっすぐなものを曲げ
そして曲がったものをまっすぐにするのです．

ここは「人が嘆くのをすぐ鵜呑にして信じるのはよくない．信じる前にそれが本当かどうかよく吟味しなければならない．すぐに信じる者は，結果的に多くの不正を犯すことになる」ということばに続けて述べられたくだりである．例文1行目の der selbe man は「そういう，人の嘆きを聞いてすぐ信じるような人」のことであり，selbe そのものもほとんど意味はなく，リズムを整えるための一種の贅語である．「そういう人はまっすぐなものを曲げ，曲がったものをまっすぐにする，つまり，本来の正邪を逆にしてしまう」と言う．2行目の machen kan と3行目の machet は，内容的には同じことであり，kan そのものにはほとんど意味はない．

kunnen はどの作品でも非常に多く用いられ，中でも直説法現在単数形 kan は，とくに不定詞との結び付きで押韻に多用される．例えば『ニーベルンゲンの歌』では46回の kan のうち不定詞との結び付きが39回ある．そのうち kan で10度，不定詞で18度押韻し，11度は他の語が行末に来ている．この作品は『クードルン』と同じく，他の宮廷叙事作品と異なり長行で書かれていて，一行が倍近くなる．そのため kan と不定詞との結び付きが押韻に用いられる確率は他の作品に比べると，多少少なくなる．しかし kan が単独で現われている7度の例は，先に述べたようにすべて kan で押韻している．

『イーヴァイン』では kan は単独で押韻して現われる2回の例を含めて46度出てくるが，44度の不定詞との結び付きのうち kan で32度，不定詞で11度押韻（先に挙げた(18)の例では kan でも不定詞でも押韻）し，他の語が行末に来ているのはわずか2回だけである．『パルツィヴァール』では102個所 kan が現われるが，そのうち不定詞との結び付きが81回あり，それらの中で kan で押韻が28度，不定詞での押韻が47度，それ以外の語が行末に来るのはわずか6度にすぎない．また，不定詞を伴わず kan が単独で現われる場合でも，21回中14回 kan が行末に置かれている．kan 以外の形でも多く不定詞を伴い，不定詞で押韻している．さらには stuonden と韻を合わせるために，少々無理な形であるが，kunden の代りに kuonden という形を3度用いている[8]．一例を示すと，

(22) die vor dem künege stuonden

und wol mit zühten kuonden. (Parz. 493, 17f.)
彼女たちは王の前に立っていたが
皆，礼儀作法をしっかりと心得ていた．

3つの作品でkanが押韻に用いられている数を一覧表にして示してみると，

		NL	Iwein	Parz.
kan 単独	押韻	7	2	14
	非押韻	0	0	7
不定詞とともに	kanで押韻	10	32	28
	不定詞で押韻	18	11	47
	非押韻	11	2	6

ところで，このように数多く用いられるkanの押韻相手の語は『ニーベルンゲンの歌』では17回のうち，spilman 1回を含めて man が9回，『イーヴァイン』では34回中 Hartman と nieman それぞれ1回を含めて man が28回，『パルツィヴァール』では42回中 Yrschman 1回と dienstman 2回を含めて，実に34回が man である．これは，gân が前者2つの作品で多くの語と押韻しているのと比べると，対照的である．

4．tuon と不定詞

中世盛期の文学作品では tuon は動詞の中で sîn（wesen）に次いで多用される語であろう．多くの語形を持ち，意味範囲の広い tuon は，脚韻を踏むのに極めて便利な動詞であるという視点から，筆者はこれまで tuon のさまざまな用法を調べた[9]が，しかし不定詞を伴う用法はそれほど多くはなく，それも作品によって大きく異なる．そして今我々が問題にしている迂言表現はむしろ少ない．この用法は古高ドイツ語では極めて稀で，オトフリート・フォン・ヴァイセンブルク（Otfrid von Weissenburg）の『福音書』*Evangelienbuch* には，わずかに1例しか現われていない[10]．Mhd. でもそれほど多くはないが，例えばヴァルター（Walther von der Vogelweide）に

(23) Nû biten wir die muoter

und ouch der muoter barn,
si reine und er vil guoter
daz si uns tuon bewarn. (Walth. 5, 39-6, 2)
さあ，我々は頼もう，聖母と
そしてまた聖母の御子に
清らかな彼女と，いと良き方である彼，
彼らが我々を守って下さるように．

この例はヴァルターのライヒ（Leich）という，詩節，韻律の一定しない詩形で表わされる抒情詩で，マリアを讃えた歌の一節である．1行目と3行目，2行目と4行目が押韻する交差韻になっていて，4行目の daz 文では意味上は bewarn だけでよいところが，リズムを整え，barn と押韻するために tuon bewarn と迂言形を用いている．

Mhd. の辞書は tuon の用法の分類で，他動詞として4格の目的語をとる中に，名詞化された不定詞句を伴う用例を挙げている[11]他に，4格と不定詞を伴う例を別に分けている．前者は不定詞句を名詞とみなし，後者はその用例からすると，この種の tuon を使役の助動詞と解しているようである．そしてそれとは別に項目を立て[12]，単一の動詞の書きかえに不定詞を伴う用法を分類している．その説明によると，この用法はもっと後の時代に，とくに民謡において非常に多くなるが，12，13世紀ではまだ稀であり，そこに挙げられた例も，別の解釈も可能だとしている．そして事実，次の『パルツィヴァール』からの引用個所については，学者によって見方が分かれている．

(24) daz ir manlîche sinne
und herzenhaften hôhen muot
alsus enschumpfieren tuot? (Parz. 291, 6-8)
あなたが雄々しい心
勇敢な高揚した気持を
そのように打ちのめすこと

Mhd. の辞書とグリムの文法書[13]はこの enschumpfieren tuot を en-

schumpfieret の迂言形の例として挙げているのに対し，バールチュ（K. Bartsch）は彼の編んだテキストのこの個所に注を付し，ここは bewirkt daß er solche Niederlage erleidet であり，不定詞は受動的意味だとしている[14]．また，マルティン（E. Martin）もこれを迂言表現ではなく zu einer Niederlage bringen laßt だとし，tuon の迂言表現は稀な例外しかないと述べ，『クードルン』の1065, 4を参照するよう指示している[15]．そこで『クードルン』からの例を２つ挙げてみよう．

(25) klagen si dô beide　　von ir dienste herzelîche tâten
(Kudr, 1065, 4)
彼女たちは２人ともそのつらい仕事のことでおおいに嘆いた．

(26) wer sît ir, juncfrouwe,　　diu uns frâgen tuot? (Kudr. 1484, 2)
娘さん，私たちにお尋ねになるあなたはどなたですか．

1484, 2 の frâgen tuot に編者は次のように詳しい注を付けている．「tuon の人称形と不定詞による単独の動詞の書きかえは，Mhd. では非常に稀である．それらの例はふつう，動詞 tuon の現在形（しかし1065, 4 は別）を示している．中世後期になってやっとこの構文はより頻繁になる…」[16] と述べている．しかし『クードルン』の２つの例と『パルツィヴァール』のこの例は用法上どう違うのか明確でない．バールチュとマルティンはどちらもこの個所の tuon を使役の助動詞にとっているようであるが，この enschumpfieren は他動詞で，manlîche sinne と herzehaften hôhen muot をその直接の目的語とし，行為の主体はこの文の主語irである．従って tuot の主語と同じであり，tuot は意味上不必要で，ここは enschumpfieren tuot で単独の enschumpfieret と同じ意味である．これは前行の muot と押韻するための tuon による迂言表現と見るべきであろう．グリムによれば，不定詞を伴う tuon は元来，使役的な意味であった．そして文の主語と異なる，不定詞の主語に当たるものは４格，時に３格で表わされた．しかしその４格あるいは３格がなく不定詞の主語が文の主語と一致する場合は，tuon が助動詞として，不定詞の定形を用いる代わりの迂言表現となる[17]．

辞書，文法書には『ニーベルンゲンの歌』からの用例が紹介されてい

ないが，この作品にも tuon のこの用法と解すべきところが何例かあるので，次にそれを示してみよう．

(27) ich weiz iuch, küneginne, sô zornec gemuot,
daz ir mich unde Hagenen vil swache grüezen getuot.
(NL 2363, 3f.)
王妃よ，私には分かっている．そなたはたいそう
腹を立てているので，
私にもハゲネにも，ろくろく挨拶もしないのだ．

この例の grüezen は 4 格目的語 mich unde Hagenen と副詞 vil swache をとり，明らかに動詞としての機能を保持し，その主語に当たるのは，文の主語と同じ ir である．従がってこの getuot は上に挙げた (24) ～ (26) の例と同じ tuon の用法であろう．このような動詞としての機能を明らかに持っている不定詞句をも名詞的用法として tuon の目的語とみなすのか，あるいは迂言表現と解するのかは微妙な問題であろうが，前者の場合は，不定詞をはっきりと中性名詞として扱う次のような用例もあるので，我々は今見ているような表現は tuon による迂言表現で，押韻のために用いられたものと解釈すべきであろう[18]．C写本に基づく版ではまさにこの個所が，

(27′) daz ir mir und Hagenen vil swachez grüezen getuot.
(NL C 2422, 4)

として，不定詞を完全な中性名詞として扱い，jm et[4] tun の構文になっている．

デ・ボーアは以前の版（例えば第19版）では，B写本に基づく原則を敢えて破り，この行はバールチュの版を変更し，C写本に従っていたが，最新の版では上記のようにB写本に基づく元のバールチュの版に戻している．本稿ではこれ以上その詳細には立ち入らないが，C写本では tuon が不定詞を伴う場合，不定詞に冠詞や形容詞を付けて，名詞として扱う傾向がはっきり見られる．

5．pflegen（phlegen）と不定詞

Mhd. の辞書によれば pflegen は「その基本的な意味は，あるものと係りを持つということのようである．そこから，人の場合にはその人の立場や関係のあり方に応じて，人に仕える，人の世話をする，人を引き受ける，監督するなどとなる．事物の場合は，保管する，調達する，また，所有する，持っていると同じ意味になることも稀ではない．行為の場合には，仕事として行なう，義務として処理するということで，その場合，不定詞を伴うと，ごくわずかのニュアンスの違いはあるにしても，たいていは（その不定詞の）単なる書きかえにすぎない．習慣としている，たいていそうするという Nhd. の意味は Mhd. では先ず例外的にしか現われない．（Mhd. を読む場合にはこのことによく注意しなければならない）」とあり，さまざまな用法，用例が挙げられている[19]．ところが個々の作品における用例を詳しく調べてみると，これも不定詞との結び付きについては，作品によって大きく異なるところがある．この動詞についても押韻技法の観点から用例を検証してみよう．

この動詞は Ahd. では極めて少なく，『タツィアーン』*Tatian* では皆無，オトフリートでも，子音推移のしない形 plegan が 2 度現われるのみである．ところが Mhd. ではよく用いられるようになり，どの作品にも共通して見られるのは 2 格の目的語をとる用法である[20]．そして『イーヴァイン』，『パルツィヴァール』とも不定詞を伴う場合でも，次のように名詞化された 2 格である．このような例はそれぞれ 2 度及び 9 度見られるが，いずれも pflegen の何らかの形で押韻している．

(28) swâ sî turnierens pflâgen,
des sî niht verlâgen,
dâ muose selch rîterschaft geschehen
die got mit êren möhte sehen: (Iw. 3043-46)
馬上試合がどこで行なわれようとも
彼らはそれに加わる機会を決してのがさなかったが，
そこでは神も御覧になれば誉れに思われるほど
すばらしい騎士の試合が行なわれた．

(29) swer gein im tjostierens pflac,
daz der hinderm orse lac/... (Parz. 596, 17f.)
彼を相手に一騎打ちを行なう者は誰でも
突き落とされて馬の向こうに転がり落ちるほど/...

pflegen は『ニーベルンゲンの歌』でもほとんどが2格の目的語をとる動詞として現われるが，それと並んで不定詞とともに用いられる例が，B写本に基づいたテキストでは5度見られる．そしてその場合不定詞は名詞化した2格の形ではなく，動詞の機能を残している．これらは押韻のための迂言手段と考えられ，いずれも pflegen の何らかの形が文末に来ている．その中から2例示すと，

(30) diu nie gegruozte recken, diu sol in grüenzen pflegen,
dâ mit wir haben gewunnen den vil zierlîchen degen.
(NL 289, 3f.)
これまで一度も勇士に挨拶したことがない彼女に
彼に挨拶させましょう．
そうすることで我々はあの立派な勇士を味方に
することができましょう．

(31) wie güetlîche vrâgen diu marcgrâvinne pflac,
(NL 1168, 2)
何とやさしく辺境伯婦人は尋ねたことか．

次に pflegen が ze のない不定詞をとる例として辞書に挙げられている『ニーベルンゲンの歌』の用例のうち，写本によって異なる個所を検討してみたい．先ず，BMZ のこの巻の編者ツァルンケ（F. Zarncke）がみずから編んだ，C写本に基づいたテキストから引用した例を示すと，

(32) Ortwîn unde Sindolt, die zwêne küene degen,
die wâren vil unmüezic. die zît si muosin pflegen,
der truhsæze unt der schenke, rihten manigen banc:
(NL C 782, 1-3)
オルトヴィーンとジンドルト，この2人の勇士，

彼らはたいそう忙しかった．その間に彼ら，
この内膳頭と献酌侍従は多くの席を用意
しなければならなかった．

2行目の pflegen は次行の不定詞 rihten とともに用いられた迂言的用法で，前行末の degen と押韻している．我々が上で見てきた用法と同じである．ところが今日定本として用いられている，主としてB写本に基づいたテキストでは，ここは次のように pflegen がこの作品で唯一 ze ＋不定詞とともに現われている．

(33) Hûnolt der küene　　und Sindolt der degen
die heten vil unmuoze.　　die zît si muosen <u>pflegen</u>
truhsæzen unt schenken,　　<u>ze rihten</u> manige banc.
(NL B 776, 1-3)

このテキストの元の編者バールチュは3行目後行の ze rihten を，C写本に従って ze を取り rihten とし，pflegen と rihten で rihten の迂言形と解釈している[21]．ところが2行目の終り，pflegen のあとにコンマを置き，3行目前行の truhsæzen unt schenken を2行目後半の si と同格と解した．しかし truhsæzen と schenken はどちらも複数であるため，2人の勇士それぞれの同格としては合わないことになり，文法的に齟齬をきたす．そこでこの版の改訂者デ・ボーアは(33)に示したように，このコンマを取り，truhsæzen unt schenken を pflegen の2格目的語とした．そしてB写本に従って rihten の前に前置詞 ze を置いた．こうすると ze rihten は目的を表わす不定詞ということになり，脚注でもそう説明している[22]．文法的にはこれで問題はなくなったが，しかし Mhd. ではこのような目的を表わす ze＋ 不定詞は pflegen には極めて特異な用法で，辞書にもそのような例は挙げられていない．また，この作品の第11詩節に Metz のオルトヴィーンは王の truhsæze で，フーノルトは kamerære，ジンドルトは schenke とあるところから，問題のこの個所は文法的にも内容的にも，C写本の方が正確と言える．デ・ボーアはバールチュの版の改訂に当たり，できるだけB写本に忠実に従おうとする

ところが見られるが，ここはC写本に従ったバールチュの解釈を残した方がよいと思われる．

さて，『ニーベルンゲンの歌』の中で pflegen についてもう一個所，テキスト・クリティクの上で問題があると思われる個所を示してみよう．

(34) dar gie der herre Sîfrit, dâ der stein gelac;
Gunther in dô wegete, der helt in werfenne pflac.
(NL 463, 3f.)
勇士ジーフリトは石が置かれているところへ行った．
グンテルがそれを持ち上げて，勇士がそれを投げたのである．

ここでは pflac が名詞化された不定詞の3格をとっている．しかし Mhd. では pflegen が3格をとる場合は，さらに事物の2格を伴って「人[3]に物[2]を与える」の意味であり，「事を行なう」の意味ではふつう目的語は2格である．Mhd. の辞書はそのような3格をとる場合に疑問符を付けながら1例だけ挙げ，なおかつ，別の写本も参照するよう指示している[23]．上に挙げた『ニーベルンゲンの歌』の当該個所はA写本では des wurfes と2格，BとC写本では werfenne と3格になっている．辞書のこの巻の編者ツァルンケはB，C写本のこの個所に「大きな疑念なしとしない」と疑問を程し[24]，C写本がオリジナルに最も近いと主張してみずからが編纂したテキストでは敢えてa写本に従って，不定詞 werfen に変えている．B写本に基づいたバールチュもここは他の写本（Iやh）をとり werfennes と2格にしている．ところがデ・ボーアはそれをB写本に戻し，C写本に基づいたヘニッヒ（U. Hennig）もそれに従って werfenne と3格にしている．しかし当時の用法からしてこのような3格は特異であり，この作品にはそぐわない．ここは敢えて不定詞か名詞の2格の方が適当であろう．

次に『イタリアの客人』に現われる pflegen を見てみよう．ここでは pflegen は46度用いられ，そのうち不定詞を伴うのが4例（うち3度が不定詞で押韻），ze＋不定詞が14例（そのうち12度が不定詞で押韻）あり，他の作品と異なり，とくに ze＋不定詞の多いのが目に付く．今それらをそれぞれ一例ずつ挙げると，

(35) sô phlît der phaffen senfte leben
den rîtern ouch nît geben. (W. Gast 12721f.)
しかし僧侶たちの穏やかな生き方は
一方で騎士たちに嫉みを与える．

(36) der eine minnet vast daz spil,
der ander phleget zessen vil,
der dritte phleget ze beizen gerne; (W. Gast 3931-33)
ある者は賭博をたいそう好み，
ある者はまた，大食を常とし，
ある者は鷹狩を好んで行なう．

(35) の例は上で見たのと同じ用法で，韻律を整えるために phleget の代りに縮約形の phlît となっている．(36) の方は2つとも Nhd. の pflegen＋zu＋ 不定詞の用法に近い．2行目の zessen は ze essen の融合形であり，迂言表現としては ze は不必要であろうし，押韻とも無関係である．とくに3行目はリズムの関係からしてもわざわざ ze を入れる必要がないし，押韻にも関係していない．ただし，この2個所以外の12例ではすべて不定詞で押韻している．

『イタリアの客人』は1215～16年に書かれた作品である．外国人の書いたドイツ語とはいえ，作者トマジン（Thomasin von Zirclaria）は当時の宮廷文学に通暁した知識人であり，その作品にこれだけ ze ＋不定詞との結び付きが用いられていることから，この用法は当時のドイツ語にある程度定着していたと考えられる．pflegen についても押韻によく用いられた形を一覧表にして示してみよう[25]．

	NL	Iwein	Parz.	W. Gast
[ge-] pflac	30 (22)	22 (20)	87 (61)	3 (0)
pflâgen	12 (0)	3 (1)	16 (11)	1 (1)
[ge-] pflegen	46 (43)	4 (3)	37 (33)	16 (9)
pfleget			25 (12)	6 (2)
pflegt			4 (0)	7 (6)
pflæge	5 (0)		14 (10)	2 (1)
総数（その他も含め）	99 (66)	38 (30)	207 (142)	46 (27)

6．beginnen と不定詞

(37) Nu Tristan der begunde
einen leich dô lâzen clingen în
von der vil stolzen vriundîn
Grâlandes des schœnen.
do begunde er suoze dœnen
und harpfen sô ze prîse
……(Trist. 3584-89)
そこでトリスタンは美しい
グラーラントのたいへん気位の高い
恋人のことを歌った曲を
彼らのために演奏し始めた．
その時彼は甘美に鳴り響かせ
あまりに見事に弾奏したので/……

上の例には beginnen の弱変化過去形 begunde が2度，それぞれ不定詞を伴って用いられている．最初の方は begunde lâzen clingen で「演奏し始めた」であるが，2つ目の begunde dœnen und harpfen では，begunde に行為の開始の意味はなく，不定詞との組み合わせで押韻し，行のリズムを整えるために用いられた迂言用法であろう．Mhd. の文学作品には，2つ目の begunde のように，beginnen の定形がほとんど本来の意味なしに不定詞を伴う例が頻繁に見られるが，時としてどちらとも決めかねる場合もある．

beginnen は元来 schneiden を意味し，パンや肉を切ることから「食事を始める」という意味に広がり，やがて物事全般を始めることを表わすようになったということである[26]．そして Ahd. において過去形に，gunnen (nhd. gönnen)の類推から弱変化形が作られ，Mhd. では begunde, begonde が本来の強変化単数 began と並んで用いられ，複数過去はもっぱらこの弱変化形であり，過去分詞は begunnen であった．

beginnen はまたすでにゴート語において単独の不定詞とともによく用いられていたようで[27]，Ahd. でも同様であった．例えば『タツィアー

ン』では本動詞として4度に対し，不定詞を伴って32度現われる．しかし何よりもオトフリートで多用され，押韻に利用された．そこでは単独で用いられた51例中48度，不定詞を伴う75例中71度どちらかで押韻し，ほとんど押韻用の語とも言えるほどである．グリムによれば[28]，Ahd. で前置詞付きの不定詞を伴う形が見られるそうであるが，上記の2つの作品には zi を伴う不定詞との例は皆無である．Mhd. の文学作品においてもその傾向は変わらず，とくに ze のない不定詞とともに非常に多く現われる．beginnen は本動詞としては稀に目的語なしで用いられるが，ふつうはもっぱら2格の目的語をとり，受動でも現われる．それぞれ1例ずつ示すと，

(38) der übel man sol sîn gekleit:
zem tôde beginnet sîn leit. (W. Gast 5589f.)
悪しき者は（その死を）嘆かれるがよい．
死ぬ時にその者の苦しみが始まるのであるから．

(39) Wes bîtet ir, mîn herre? wan beginnet ir der spil,
der iu diu küneginne teilet alsô vil? (NL 471, 1f.)
何を待っておられるのですか，わが殿．
なぜ競技を始めないのですか．
あの女王があなたにあれほど求めたあの競技を．

(40) nû bitet in sîn mære,
des ê begunnen wære,
durch iuwer liebe volsagen. (Iw. 185-7)
さあ，彼に命じて下さい，
先ほど始められた彼の話を
あなたのために最後まで話すように．

beginnen が不定詞を伴う場合は名詞化した2格をとることも極めて稀にあるが，筆者の調べた範囲内では『パルツィヴァール』に2例だけで，『ニーベルンゲンの歌』にも『イーヴァイン』にも見当たらない．beginnenは2格の目的語をとるよりもはるかに多く単独の不定詞を伴い，しかも「～し始める」というより，不定詞の単なる言いかえにすぎ

ない場合が非常に多い.

(41) Êrec der junge man
sîn vrouwen vrâgen began
ob erz ervarn solde. (Er. 18-20)
若武者エーレクは
彼の女主人に尋ねた,
それを聞き質してこようかと.

(42) Den schilt hiez dô Hagene von im tragen dan.
dô begonde Dancwart hin ze hove gân. (NL 1703, 1f.)
そこでハゲネは盾を自分の手元から持ち去らせた.
その時ダンクヴァルトが宮殿へとやって来た.

(43) Feirefîz Anschevîn
sach dise vrouwen gein im gên:
gein den begunde er ûf dô stên, (Parz. 764, 16-18)
アンショウヴェのファイレフィースは
その婦人たちが彼の方に来るのを見た.
そこで彼は立ち上がって彼女たちを迎えた.

(41) の例では vrâgen began で vrâgete の意味, (42) (43) ではそれぞれ begonde gân で gienc, begunde stên で stuont の意味と同じように用いられている.

beginnen が ze を伴う不定詞と用いられるのは, 本稿で考察の対象とした作品の中では『パルツィヴァール』に2度,『ニーベルンゲンの歌』に1度と, 極めて稀であり,『ニーベルンゲンの歌』の例は次のように3格の語尾を付けたもので, これも押韻のための特別な形であろう.

(44) "Welle wir uns scheiden", sprach dô Hagene,
"êz daz wir beginnen hie ze jagene? (NL 930, 1f.)
「ここで狩を始める前に我々は別々に
分かれてやろうではないか」とその時ハゲネが言った.

『ニーベルンゲンの歌』では165回用いられる beginnen のさまざまな

形の中で，とりわけ直説法単数過去の強変化形 began は87回現われて，それらは単独の動詞として4回，不定詞を伴う結び付き83回すべてにおいて began で押韻している．ところが『イーヴァイン』と『パルツィヴァール』では began が目立って少なく，それぞれ4度と3度だけ不定詞とともに現われ，began が文末に来ている．両作品では begunde, begunden が不定詞で押韻して用いられる例が多い．これに対し『イタリアの客人』では beginnen は非常に少なく，この語も作品によって頻度，用法に大きな違いがある．beginnen のさまざまな語形と押韻の割合を次に一覧表にして示してみよう．

	NL		Iwein		Parz.		W. Gast	
	a[1]	b[1]	a	b	a	b	a	b
began	4 (4)	83 (83)		4 (4)		3 (3)	1 (1)	2 (0)
beginne		3 (1)					2 (2)	
beginnet	1 (0)			1 (1)	1[2] (0)	1 (1)	3 (0)	1(1)
begonde	1 (0)	43 (9)						
begunde	2 (0)	8 (0)	1 (1)	21 (18)	5 (3)[3]	82 (69)		
begund'		3 (1)		4 (4)		3 (3)		
begunden		1 (0)	2 (1)	11 (8)	3 (1)[2]	27 (25)		
begunnen			1 (1)[4]		4 (4)[5]			
総　数	10(4)	156(100)	4 (3)	42 (36)	15(9)	123(108)	6(3)	3(1)

1) a の欄はそれぞれの作品で beginnen が単独で，もしくは目的語をとって本動詞として用いられた数を示し，b の欄は beginnen が不定詞を伴って用いられた数を示す．かっこ内はいずれもそのうちの押韻数を示す．
2) 名詞化された不定詞で2格の語尾が付いたもの．
3) 3例のうち29,30と575,22は ze＋不定詞を伴い begunde で押韻．
4) 受動で wære で押韻．
5) 3例は受動，begunnen で押韻，1例（66,22）は完了，hât で押韻．

さて，最後に，押韻のテーマとは直接結び付かないが，本論を進めるに当たってさまざまな用例を分類，検討する中で，beginnen について，テキスト・クリティク上問題があると思われる個所が1例見つかったので，それを検証してみよう．

(45) er sol ouch haben die sinne

daz im sîn sælikeit beginne
die êwiclîchen sælikeit,
sô hât er sich nâch reht beleit. (W. Gast 4959-62)
彼はまた，我が身の幸福が
永遠の至福の始まりとなるように
分別を持たねばならない．
そうすれば自らを正しく導くことになる．

ここは『イタリアの客人』の中で，人の幸，不幸について言及した部分の一節である．我々は誰も，なぜ自分の身に幸，不幸が起こるのか，本当のところを知らない．神が我々に幸，不幸をお与えになるのだから，神への恐れを抱かないでいてはならない．賢明な人は誰でも身の不幸が永遠の苦しみをもたらさないように努めるべきである，という内容に続く部分で，2行目最後の beginne は目的を表わす daz 文の中なので接続法第一式になって，前行 sinne と韻を踏んでいる．sîn sælikeit が主語で，3行目の die êwiclîchen sælikeit はその4格目的語ということになる．しかしながら Mhd. の辞書には beginnen には4格目的語をとる項目は挙がっておらず，Mhd. としては特異な例である．同作品でも，目的語をとる他の3個所（140. 1959. 3040）ではすべて2格であり，この個所も他の写本では der êwiglîchen selicheit と2格形になっており，F. W. v. Kries の版ではこちらをとっている[29]．beginnen が Nhd. のように他動詞として4格の目的語をとるようになったのはいつ頃なのか，筆者には定かでないが，少なくとも『イタリアの客人』が書かれた13世紀前半にはまだそのような例は見られないようであるので，この個所も2格の方が適当であるかも知れない[30]．

7．おわりに

言語は非合理的な人間と直接結びついたものであるので，言語現象もそれに伴って非合理的な側面がある．また上でも見たように，文学作品では，作者により，作品によって表現方法も言語の使用法もかなりの違いがある．従って一般論としては，どれが正しくどれが誤りであるとい

う価値判断を言語研究に持ち込むのは危険であり，望ましいことではない．言語を文献学的に研究する立場からは，言語現象をあるがままに見，さまざまな用例を比較検討して，ある一定の傾向を明らかにしてゆくことが大切な原則であることは言うまでもない．ただ，時代がはるかに遡り，オリジナルが残っていない作品については，何世紀にもわたって伝えられた幾種類もの写本をもとにテキスト・クリティクを行ない，いわゆる定本として示すことも要求される．その場合，写本によって異同のある個所はどれを選ぶべきか判断を求められる．このような観点から，本稿では，本論から多少それる現象であるにもかかわらず，敢えていくつかの例を示した次第である．

引用原典および主要参考文献

Hartmann von Aue: *Erec*. Mittelhochdeutscher Text und Übertragung von Thomas Cramer, Frankfurt am Main 1980 [=Er.].

Derselbe: *Gregorius*. Herausgegeben und erläutert von Friedrich Neumann; 5. Auflage, besorgt von Christoph Cormeau, Wiesbaden 1981 (Deutsche Klassiker des Mittelalters, Neue Folge Bd. 2) [=Gregor.].

Derselbe: *Iwein*. Herausgegeben von. G. F. Benecke und Karl Lachmann, neubearbeitet von Ludwig Wolff; 7. Ausgabe, Bd. 1 Text, Berlin 1965 [=Iw.].

Derselbe: *Iwein*. Text der 7. Ausgabe von G. F. Benecke, K. Lachmann und L. Wolff, Übersetzung und Anmerkungen von Thomas Cramer, Berlin 1968.

Derselbe: *Iwein*. Aus dem Mittelhochdeutschen übertragen, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Max Wehrli, Zürich 1988.

Das Nibelungenlied. Nach dem Text von K. Bartsch und H. de Boor, ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse, Stuttgart 1997 (=NL).

Dasselbe. Nach der Ausgabe von K. Bartsch, herausgegeben von H. de Boor; 19. Auflage, Wiesbaden 1967 (Deutsche Klassiker des Mittelalters Bd. 3).

Dasselbe. Herausgegeben von Friedrich Zarncke; 15. unveränderter Abdruck des Textes, Halle 1905.

Dasselbe. Nach der Handschrift C, herausgegeben von Ursula Hennig, Tübingen 1977.

Der Nibelunge Nôt. Mit den Abweichungen von der Nibelunge Liet, den Lesarten sämtlicher Handschriften und einem Wörterbuche. Herausgegeben von Karl Bartsch; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1880, Hildesheim 1966.

Wolfram von Eschenbach: *Parzival.* Mittelhochdeutscher Text nach der 6. Ausgabe von K. Lachmann, Übersetzung von Peter Knecht, Einführung zum Text von Bernd Schirok, Berlin—New York 1998 [=Parz.].

Wolfram's von Eschenbach: Parzival und Titurel. 3 Teile. Herausgegeben von Karl Bartsch, Leipzig 1870-71 (Deutsche Classiker des Mittelalters Bd. 9-11).

Wolfram's von Eschenbach: Parzival und Titurel. Herausgegeben und erklärt von Ernst Martin. Zweiter Teil: Kommentar, Halle 1903.

Gottfried von Strassburg: *Tristan.* Nach dem Text von Friedrich Ranke neu herausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn, 2., durchgesehene Auflage, Stuttgart 1981 [=Trist.].

Die Gedichte Walthers von der Vogelweide. Herausgegeben von Karl Lachmann. 13., aufgrund der zehnten, von Carl von Kraus bearbeiteten Ausgabe, neu herausgegeben von Hugo Kuhn. Berlin 1965.

Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria. Herausgegeben von H. Rückert, mit einer Einleitung und Register von F. Neumann, Berlin 1965 [=W. Gast].

Kudrun. Herausgegeben von K. Bartsch; Neue ergänzte Ausgabe der 5. Auflage, überarbeitet und eingeleitet von Karl Stackmann, Wiesbaden 1980 (Deutsche Klassiker des Mittelalters) [=Kudr.].

Der guote Gêrhart von Rudolf von Ems. Herausgegeben von John A. Ascher; 2., revidierte Auflage, Tübingen 1971 [=g. Gerh.].

Tatian. Herausgegeben von Eduard Sievers, 2. neubearbeitete Ausgabe; Unveränderter Neudruck, 1966 Paderborn.

Paul Piper (Hrsg.): *Otfrids Evangelienbuch. Mit Einleitung, erklärenden Anmerkungen, ausführlichem Glossar und einem Abriss der Grammatik.* II. Theil: Glossar und Abriss der Grammatik, Freiburg i.B. 1887.

Johann Kelle (Hrsg.): *Otfrids von Weissenburg Evangelienbuch. Text Einleitung Grammatik Metrik Glossar*, III; Nachdruck der Ausgabe 1881, Aalen 1963.

Jacob Grimm: *Deutsche Grammatik.* Bd. IV. Herausgegeben von Gustav Rœthe und Eduard Schröder; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Gütersloh

1898, Hildesheim 1967.

Jacob und Wilhelm Grimm: *Deutsches Wörterbuch*; Nachdruck der Erstausgabe 1854-1971, München 1984.

G. F. Benecke, W. Müller, F. Zarncke: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch* I-III; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-66, Hildesheim 1963 [=BMZ].

G. F. Benecke: *Wörterbuch zu Hartmanns Iwein*. 2. Ausgabe, besorgt von E. Wilken; Genehmigter Neudruck der Ausgabe von 1874, Wiesbaden 1965.

R. A. Boggs: *Hartmann von Aue Lemmatisierte Konkordanz zum Gesamtwerk*. Nendeln 1979 (Indices zur deutschen Literatur 12/13).

F. H. Bäuml/E.-M. Fallone: *A Concordance to the NIBELUNGENLIED* (Bartsch—De Boor Text), Leeds 1976.

C. D. Hall: *A complete Concordance to Wolfram von Eschenbach's Parzival*. New York & London 1990.

注

1) Vgl. Duden: *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*; 6., neu bearbeitete Auflage, Mannheim 1998, S. 770 § 1339.

2) Ibid. S. 626 § 1100.

3) tun の接続法第二式は口語では接続法 würde の代りに用いられることがある．これらの他に haben にも不定詞をとる特別な用法がある．ひとつは形容詞 gut を伴って，du hast gut schenken で es ist für dich leicht zu schenken の意味，du hast gut reden で，「君は部外者だから言うのは簡単だが，そう簡単にはいかない」というニュアンスで用いられる．もうひとつは，4格の目的語とともに不定詞をとって，両者が主語と述語の関係になる，ich habe ein Faß Wein im Keller liegen や er hat zwei Pferde im Stalle stehen のような用法である．これらは haben が述語形容詞をとる形の変形として，ごく限られた範囲の特別の意味で用いられるようになったもので，古いドイツ語には見られない用法である．また bleiben も sitzen, stehen, liegen などの状態を表わす継続相の動詞の不定詞とともに「…したままである」という意味で用いられる．そして，この結び付きも Ahd. や Mhd. ではまだ現われない．

4) Vgl. de Boor: NL S. 325 Anm. zu 2079, 1.

5) 武市修「中世ドイツ語における迂言表現 —— 押韻技法の観点から —— その

1」『関西大学独逸文学』第42号 平成10年 3 月 163ページ参照.

6) Th. Cramer は sîne rîterschaft も sîne kraft もともに vristen の目的語として訳しているが，M. Wehrli は筆者と同じ解釈である．BMZ にも kan の項目の 4 格をとる用例としてここが挙がっており，Benecke の『イーヴァイン辞典』にも，その用法のところに挙げられている．ただその辞典の vristen の項を見ると，この vristen が関係文の kan ではなく，さらに 2 行上の主文の muose に関係づけられている．しかしそれでは余りに離れすぎていて，少し無理があるように思われる．

7) Vgl. BMZ I, 807[a], 5ff.

8) 同じようなことが形容詞 kunt にもあり，kunt の代りに18度 kuont として押韻している．

9) Vgl. O. Takeichi: Zum Ersatzverb tuon. In: *Sprachwissenschaft* 17 (1992) Heft 2, S. 200－221; 武市修「duan, tuon, machen について」日本独文学会編『ドイツ文学』第92号（1994）55－65ページ.

10) 同上書57ページ参照.

11) Vgl. BMZ III 136[b], 46－137[a], 11.

12) Ibid. 141[b], 43－142[a], 15.

13) Vgl. Grimm: *Grammatik* 4, 94.

14) Vgl. Bartsch: *Parzival* 1. Teil, S. 311.

15) Vgl. Martin: *Parzival*, S. 254.

16) Vgl. *Kudrun* S. 294 Anm. zu 1484, 2.

17) 武市修．同上書57ページ参照

18) 上に挙げた例はすべて押韻のための手段と見ることができる．これらの例は本論に都合のよいものばかりを挙げたわけではない．例えば Bartsch が彼の『ニーベルンゲンの歌』の辞書に，名詞的に用いられながら動詞の格支配も保持した不定詞と tuon の結び付きとして分類した34例中，tuon，不定詞とも押韻に関係しないのはわずかに 2 例にすぎない．なお，そこに挙げられた個所の表示の中で，280，4 の C 写本に当たる個所は280, 2 の誤りである．Vgl. Bartsch II. 2, S. 315.

19) Vgl. BMZ II[1] 497[a], 9ff.

20) Nhd. でもその名残りは強変化の自動詞として der Ruhe pflegen のような用法に残っている．

21) Vgl. Bartsch II. 2, S. 243.

22) Vgl. de Boor: NL S. 131 Anm. zu 776, 3.

23) Vgl. BMZ II[1] 499[a], 43ff.

24) Ibid. 498[a], 6ff.

25) 正書法が pflegen と phlegen の両方あり，作品によってどちらか一方に限られる場合と，両方のつづり方が用いられる場合がある．ここでは紙幅の関係でそれらを一括して pflegen の表示にまとめた．『パルツィヴァール』では不定詞に pflegen と並んで pflegn のつづり方もあるが，これも pflegen にまとめた．また，ge- の付く形のあるものは ge- の付かない形のものと一緒に組み入れた．

26) Grimm: *Wörterbuch* Bd. 1, Sp. 1296,

27) Grimm: *Grammatik* 4, 95.

28) Ibid.

29) Vgl. Thomasin von Zerclaere: *Der welsche Gast*. 3 Bde. Herausgegeben von F. W. von Kries, Göppingen 1984, Bd. 1, S. 230.

30) NL 1360, 4 に hey waz man kurzewîle　den künege ze êren began! という文があり，この場合この was は 4 格と見られる．waz や swaz で始まる文では，しばしば部分の 2 格が現われ，wieviel あるいは was für の意味になり，waz は多くの場合主語か 4 格の目的語である．ここでもそうとれば began が 4 格の目的語をとる例だということになるが，Bartsch はこの個所を beginnen が 2 格をとるところに分類している．この waz は 4 格でも感嘆文の中の副詞的用法なのか，それとも 2 格が重なったとき一方の語尾が欠けるという現象に準じたものなのか，あるいは beginnen が 4 格をとっているのか，筆者には定かでない．

C 写本ではこの個所が vil maniger kurzewîle man im zen êren dâ began とはっきり 2 格になっている．pflegen にも同じような例がある．Iw. 3515 に ouwî waz ich êren pflac! の pflac を Benecke はその『イーヴァイン辞典』で 2 格をとるところに分類しているが，この waz も形の上では 4 格である．これも上の『ニーベルンゲンの歌』の個所と同じ用法である．これらの 4 格 waz については，本稿とは直接かかわらない現象であるが，付随的な問題として興味深い．これについては今後の課題として改めて検討したい．

Umschreibungsausdrücke im mittelalterlichen Deutsch

— unter besonderer Berücksichtigung des Endreims — (2)

Osamu TAKEICHI

Im Mittelhochdeutschen werden viel mehr Verben mit Infinitiv zusammen gebraucht als im Neuhochdeutschen, und zwar ohne die Präposition *ze*. In dieser Verbindung bezieht sich der Infinitiv gewöhnlich vielmehr ohne *ze* auf ein Verb. Unter diesen Kombinationen gibt es meines Erachtens solche, die ohne besondere Nuance zur bloßen Umschreibung eines einfachen Verbums zum Reimen dienen.

1. Bewegung bezeichnende Verben mit Infinitiv

gâhen, gân, îlen, rîten, varn usw. erscheinen häufig mit einem den Zweck der Bewegung bezeichnenden Infinitiv, was sich zum Teil noch im Neuhochdeutschen findet. Unter diesen Verbindungen kommen manchmal Fälle vor, wo das finite Verb fast keine eigene Bedeutung hat, sondern der Infinitiv die Rolle als wirkliches Prädikat spielt, wie zum Beispiel:

(1) *nâch so grôzer arbeite/ vart ruowen*...(g. Gerh. 2732f.)

Vor allem bei einer finiten Form von *gân* mit einem infiniten *sitzen* hat *gân* oft keinen Sinn, sondern diese Verbindung bedeutet einfach „sitzen", wie die folgenden beiden Beispiele zeigen:

(2) *Gêren den vil rîche bat man an den sedel gân.*
„Erloubet uns die botschaft ê daz wir sitzen gên.
(NL 745, 4-746, 1)

(3) *An ein gestüele er sitzen gie,*
den koufman er des niht erlie,
er muoste zuo im sitzen dran.(g. Gerh. 877-9)

sitzen gên in der zweiten Zeile des Beispiels (2) ist gleichwertig mit *an den sedel gân* in der ersten Zeile, das „Platz nehmen" bedeutet, ohne daß *gân* wirkliche Bedeutung hätte, wie bei nhd. „zu Bett gehen".

Im Nibelungenlied kommen beide Infinitivformen *gân* und *gên* vor. Die infinitivische Form *gân* bildet inklusiv viermal erscheinendes *gegân* in allen 169 Fällen den Reim. Sie hat verschiedene Reimpaarwörter wie *dan, man, getân, stân, hân* usw. *gên* steht bei 16 von 19 Belegen am Versende, und zwar reimt es sich 8mal auf *stên*, 5mal auf *verstên*, zweimal auf *understên* und einmal auf *bestên*. Im Iwein findet man nie *gên*, sondern nur *gân* und es erscheint bei 22 von 27 Belegen am Ende des Verses. Es hat auch verschiedene Partnerwörter, wie im Nibelungenlied. Im Parzival kommt umgekehrt nur *gên* ohne *gân* vor und ergibt 33mal von 42 Belegen mit *stên* (einschließlich je einmal mit *gestên* und mit *verstên*) einen Endreim.

In der Verbindung von finitem *gân* und infinitem *stân* hingegen scheint der Infinitiv *stân* fast keine Bedeutung zu haben, nur daß er zum Reimen hinzutritt.

(4) *Prünhilt mit ir vrouwen* *gie für daz münster stân.*
(NL 845, 1)

S. Grosse versieht in seiner Ausgabe diesen Satz mit der folgenden Übersetzung: „Brünhild blieb mit ihren Damen vor dem Münster stehen". Diese Wiedergabe dünkt mir aus dem folgenden Grund nicht treffend: Das Wortgefecht zwischen den beiden Königinnen steigert sich zum Kampf ums Dasein als Königin. Prünhilt wollte beim Besuch der Messe ihre Priorität zeigen, wobei Kriemhilt ihre Schwägerin mit dem Verrat deren Geheimnisses in der Hochzeitsnacht gründlich beleidigt. Wie fromm die anderen auch die Messe hören, ist Prünhilt schockiert geistesabwesend. Sie denkt nur daran, nach dem Ende des Gottesdienstes Kriemhilt über die Verhältnisse auszufragen. Den Gottesdienst ungeduldig abwartend, eilt sie gleich danach zum Ausgang des Münsters. Deshalb ist in dieser Szene nicht *stân*, sondern *gân* von

größerer Bedeutung.

stân kommt in der Verbindung mit *gân* zu irgendeiner Form 4mal im Erec und 6mal im Nibelungenlied vor, und in allen diesen Fällen steht es aus Reimgründen am Versende. Im Parzival erscheint dieser Infinitiv nur in der Form *stên* und niemals mit *gên* zusammen in einem Satz, sondern *stên* ist das Partnerwort von *gên* für den Reim. In der folgenden Übersicht werden *gân, stân* usw. gezeigt, wie oft sie in drei Werken zum Reimen benutzt werden (die Zahl in Klammern zeigt die zum Reimbezug benutzten Belege).

	NL	Iwein	Parz.
(ge-)gân	169(169)	27(22)	
gât	17(11)	16(9)	
(ge-)gên	19(16)		44(35)
gêt	7(0)		31(20)
(ge-)stân	97(97)	20(17)	
(ge-)stât	34(32)	27(17)	
(ge-)stên	15(11)		44(39)
(ge-)stêt	6(0)		73(34)

Der folgende Beleg zeigt ein Beispiel, in dem ein Partizip gewählt ist, um den Rhythmus fließend zu machen, wo ein Infinitiv normalerweise auftreten sollte, wie bei Beleg (6):

(5) *diu vür sî suochende reit*
und gewannes michel arbeit (Iw. 5775f.)

(6) *und bat ir got ruochen*
und vuor ir kempfen suochen. (Iw. 5759f.)

2. *kunnen* und Infinitiv

kunnen verbindet sich schon im Mhd. oft als Auxiliarverb mit einem Infinitiv wie im Nhd. Sonst hat es als Vollverb ein akkusativisches Objekt, oder aber wird auch mit den Präpositionen *mit* oder *ze* gebraucht. Im folgenden Beispiel hat *kan* die doppelte Rolle sowohl als

Vollverb wie als Auxiliarverb, wie M. Wehrli, BMZ und Benecke (Iwein-Wörterbuch) annehmen, wogegen Th. Cramer auch *sîne rîterschaft* als Objekt zu *vristen* hält, was mir nicht passend erscheint.

(7) *der sîne rîterschaft wol kan*
und sîne kraft mit listen
ze rehten staten vristen. (Iw. 5318-20)

Auch *kunnen* „dient bisweilen bloß zur umschreibung und braucht dann nicht übersetzt zu werden" (BMZ).

(8) *ich kan ze lange sitzen.*
daz entuon ich niht mit witzen. (Parz. 29, 19f.)

(9) *ouch wizzet daz der selbe man*
daz slehte krump machen kan
unde machet daz krumbe sleht. (W. Gast 13427-29)

Im BMZ stehen 13 Beispiele unter dieser Gruppe zugeordnet, und in all diesen Belegen kommt entweder *kunnen* zu irgendeiner Personalform oder sein begleitender Infinitiv aus Reimgründen ans Versende. *kunnen* wird in jedem Werk sehr häufig verwendet, vor allem *kan* dient sowohl allein, als auch mit Infinitiv zum Reimen, wie die folgende Tabelle zeigt. Zum Partnerwort von *kan* tritt meistens *man* ein.

		NL	Iwein	Parz.
kan allein	im Reim	7	2	14
	nicht im Reim	0	0	7
kan mit Inf.	mit *kan* gereimt	10	32	28
	mit Inf. gereimt	18	11	47
	anderer Reimbezug	11	2	6

3. *tuon* und Infinitiv

In der mittelalterlichen gebundenen Literatur findet das Verb *tuon* eine sehr häufige und vielfältige Anwendung, weil es verschiedene Konjugationsformen aufweist und großen Umfang der Bedeutungen hat, was zum Reimen bequem zu verwenden ist. Aber *tuon* kommt mit

Infinitiv zusammen relativ selten vor. In dieser Verbindung läßt sich der Gebrauch von *tuon* zweifach unterscheiden: kausativ und auxiliar. Wenn sich der Infinitiv auf ein anderes als das Subjekt des Satzes bezieht und ein Akkusativ oder ein Dativ dabei ist, ist *tuon* kausativ. Wenn das Subjekt des Infinitivs dasselbe wie das des Satzes ist, ohne daß *tuon* einen Akkusativ oder Dativ hat, ist *tuon* auxiliar und dient zur Umschreibung des einfachen Verbs. Das letztere erscheint im Mhd. seltener. Der folgende Beleg aus dem Parzival, der im BMZ und in Grimms Grammatik 4,94 als Beispiel der Umschreibung angeführt steht, ist umstritten. K. Bartsch und E. Martin sind anderer Meinung.

(10) *daz ir manlîche sinne*
und herzenhaften hôhen muot
alsus enschumpfieren tuot? (Parz. 291, 6-8)

E. Martin verweist in seiner Anmerkung zu dieser Stelle auf ein Beispiel aus der Kudrun. Hier wird eines der zwei Beispiele aus der Kudrun angegeben:

(11) *wer sît ir, juncfrouwe, diu uns frâgen tuot?* (Kudr. 1484, 2)

Was für ein Unterschied der Gebrauchsweisen von *tuon* besteht zwischen den beiden Belegen (10) und (11)? M.E. gibt es dazwischen keinen Unterschied. In beiden Beispielen ist das Subjekt zum Infinitiv (jeweils *enschumpfieren* und *frâgen*) dasselbe wie dasjenige des ganzen Satzes. Im Nibelungenlied finden wir ein entsprechendes Beispiel wie z.B.:

(12) *ich weiz iuch, küneginne, sô zornec gemuot,*
daz ir mich unde Hagenen vil swache grüezen getuot.
(NL 2363, 3f.)

Sollte man die Infinitiv-Phrase *mich und Hagenen vil swache grüezen* als Objekt zu *getuot* ansehen, wie K. Bartsch in seinem Wörterbuch in solche Gruppe einordnet? Oder ist *grüezen getuot* eine auxiliare Umschreibung von *tuon*? Wir sind der letzteren Meinung. Für das erstere gibt es eine andere Konstruktion. Die entsprechende Stelle heißt

in der Handschrift C folgendermaßen:

(13) *daz ir mir und Hagenen* *vil swachez grüezen getuot.*
(NL C 2422, 4)

Bei *tuon* mit Infinitiv kann man in dieser Handschrift eine klare Tendenz erkennen, den Infinitiv als substantiviert zu behandeln.

4. *pflegen* und Infinitiv

pflegen ist im Ahd. sehr selten belegt, wie z.B. im Tatian niemals und bei Otfrid nur zweimal. Im Mhd. aber wird es viel öfter verwendet, und zwar meistens mit einem Genitivobjekt. Daneben verbindet es sich gelegentlich mit einem noch verbale Funktion behaltenden Infinitiv, wobei von der Umschreibung zum Reimen die Rede sein kann.

(14) *diu nie gegruozte recken,* *diu sol in grüezen pflegen,*
(NL 289, 3)

Im Nibelungenlied finden wir in der Handschrift B fünf solche Belege, wo jedesmal *pflegen* zu irgendeiner Form am Versende steht. Im Iwein und im Parzival dagegen erscheint diese Verbindung nie, sondern *pflegen* mit substantiviertem Infinitiv im Genitiv, und *pflegen* kommt dabei jedesmal ans Versende.

(15) *swer gein im tjostierens pflac*
daz der hinderm orse lac (Parz. 596, 17f.)

Dann überprüfen wir eine Stelle aus dem Nibelungenlied, die je nach Handschrift anders lautet.

(16) *Ortwîn unde Sindolt,* *die zwêne küene degen,*
die wâren vil unmüezic. *die zît si muosin pflegen,*
der truhsœze unt der schenke, *rihten manigen banc:*
(NL C 782, 1-3)

Das ist ein gleiches Beispiel der Umschreibung von *pflegen* mit Infinitiv statt eines einfachen Verbs, wie oben beobachtet. Diese Stelle aber heißt in der Fassung von H. de Boor, der die Ausgabe von K. Bartsch bearbeitet hat, folgendermaßen:

(17) *Hûnolt der küene und Sindolt der degen*
die heten vil unmuoze. die zît si muosen pflegen
truhsæzen unt schenken, ze rihten manige banc.
(NL B 776, 1-3)

Der erste Herausgeber K. Bartsch zieht hier die Handschrift C vor und nimmt *rihten* ohne *ze* auf, obwohl er im großen und ganzen der Handschrift B folgt. Er deutet dieses *pflegen* mit *rihten* als Umschreibung, wie es in seinem Wörterbuch eingeordnet ist. Er setzt in seiner Ausgabe nach *pflegen* ein Komma und legt *si* im zweiten Abvers und *truhsæzen unt schenken* im dritten Anvers als Apposition aus. Aber diese Apposition ist grammatisch nicht korrekt, weil *truhsæzen* und *schenken* beide pluralisch sind. So hat der Bearbeiter de Boor diese Stelle, nach seinem Prinzip der Handschrift B folgend, geändert, wie oben angeführt. Dann sind *truhsæzen unt schenken* genitivische Objekte zu *pflegen*, und *ze rihten* bezeichnet den Zweck zu dem Vollverb *pflegen*, was er in der Fußnote kommentiert. Diese Interpretation ist zwar grammatisch richtig, aber in mhd. Literaturwerken ist diese Verknüpfung von *pflegen* und zweckbezeichnendem *ze* + Infinitiv außergewöhnlich. In der elften Strophe dieses Werkes wird Ortwîn als *truhsæze*, Hûnolt als *kamerære* und Sindolt als *schenke* vorgestellt. Geht man davon aus, kann man beurteilen, in dieser Stelle sei die Handschrift C sowohl grammatisch wie auch inhaltlich angemessener.

Im Wälschen Gast verhält es sich mit diesem Verb etwas anders. Es findet sich hier insgesamt 46mal. Davon verbindet es sich viermal mit Infinitiv ohne *ze* (,wovon dreimal der Infinitiv am Versende steht) und 14mal mit *ze* + Infinitiv (,wovon 12mal der Infinitiv zum Reimen verwendet ist). Je ein Beispiel wird hier angegeben:

(18) *sô phlît der phaffen senfte leben*
den rîtern ouch nît geben. (W. Gast 12721f.)

(19) *der eine minnet vast daz spil,*
der ander phleget zessen vil,

der dritte phleget ze beizen gerne; (das 3931-33)

phlît geben bei Beleg (18) vertritt das bloße *gît*, ganz gleichermaßen wie oben gesehen. Aber der Gebrauch von zwei Beispielen *phleget* und *ze* + Infinitiv bei Beleg (19) ist keine Umschreibung, sondern fast der gleiche wie im nhd. „pflegen + zu + Infinitiv". Auch über den Gebrauch von *pflegen* wird unten eine Tabelle gezeigt.

	NL	Iwein	Parz.	W. Gast
(ge-) pflac	30(22)	22(20)	87(61)	3(0)
pflâgen	12(0)	3(1)	16(11)	1(1)
(ge-) pflâgen	46(43)	4(3)	37(33)	16(9)
pfleget			25(12)	6(2)
pflegt			4(0)	7(6)
pflæge	5(0)		14(10)	2(1)
insgesamt	99(66)	38(30)	207(142)	46(27)

5. *beginnen* und Infinitiv

beginnen wird schon im Gotischen und auch im Ahd. oft mit bloßem Infinitiv verwendet. Im Tatian erscheint es als Vollverb viermal und mit Infinitiv zusammen 32mal. Bei Otfrid ist es meistens zum Reimen verwendet, wie bei 48 von 51 Belegen als allein stehendes Verb und bei 71 von 75 Belegen in Verbindung mit Infinitiv. Fast kann man sagen, es sei hauptsächlich ein Reimwort. Diese Tendenz bleibt auch im Mhd., und in der Kombination mit Infinitiv bedeutet *beginnen* oft gar nicht „anfangen", sondern dient nur zur Umschreibung des einfachen Verbs, damit der Vers entweder mit *beginnen* zu irgendeiner Form oder mit Infinitiv den Reim bildet. Manchmal ist es schwer zu unterscheiden, ob *beginnen* die volle Bedeutung hat oder nur zum Umschreiben verwendet wird. Auf alle Fälle steht seine starke Präteritalform *began* im Nibelungenlied viermal als Vollverb und 83mal in der Verbindung mit Infinitiv im Reim, während sie im Iwein und im Parzival nur selten erscheint. In diesen beiden letzten Werken kommen statt *began*

schwache Präteritalformen viel häufiger vor.

beginnen nimmt als Vollverb hauptsächlich ein Genitivobjekt zu sich. Aber im Wälschen Gast finden wir eine Stelle, wo *beginnen* merkwürdigerweise ein akkusativisches Objekt hat.

(20) *daz im sîn sælikeit beginne*
die êwiclîchen sælikeit, (W. Gast 4960f.)

Im BMZ steht kein Eintrag, unter dem *beginnen* mit einem Akkusativobjekt erscheint, und in der Tat findet sich ein solcher Beleg weder im Nibelungenlied, noch im Iwein, noch im Parzival. Auch im Wälschen Gast hat *beginnen* in anderen drei Stellen (140. 1959. 3040) einen Genitiv zum Objekt. Die oben genannte Stelle steht in anderen Handschriften im Genitiv, F. W. v. Kries nimmt in seiner Ausgabe die genitivische Form, *der êwiclîchen sêlicheit,* an. Dies scheint mir besser. Über *beginnen* wird unten eine Übersicht von einigen Formen gezeigt, wie oft es in vier Werken zum Reimen gebraucht ist.

	NL		Iwein		Parz.		W. Gast	
	Vollv.	mit Inf.	Vollv.	mit Inf.	Vollv.	mit Inf.	Vollv.	mit Inf.
began	4(4)	83(83)		4(4)		3(3)	1(1)	2(0)
begunde	2(0)	8(0)	1(1)	21(18)	5(3)	82(69)		
begunden		1(0)	2(1)	11(8)	3(1)	27(25)		
insgesamt	10(4)	156(100)	4(3)	42(36)	15(8)	123(108)	6(3)	3(1)

In der mittelalterlichen Reimdichtung wird das Reimen fast unbedingt verlangt, und dazu nutzen die Dichter verschiedene Mittel, zu denen sicher die Umschreibung durch einige Verben mit Infinitiv gehört, wie hier erwähnt worden ist.